

弥生時代の大藪遺跡 —集落の中の特別な空間—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>
(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

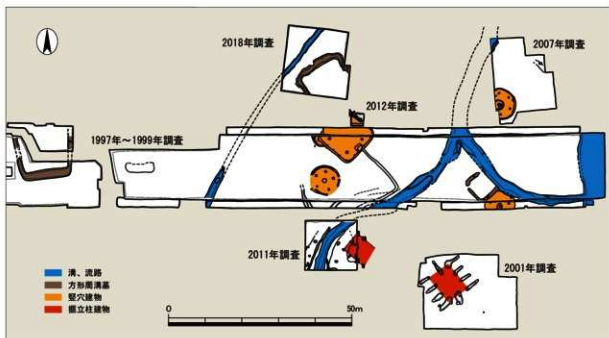


図1 周辺調査遺構図

はじめに 大藪遺跡は、京都市南区久世一帯に広がる弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡です。桂川の西岸に立地し、これまでの発掘調査では、竪穴建物や方形周溝墓などの弥生時代の遺構を中心に、各時代の遺構が見つっています。また、集落には、北西から南方向にかけて旧河川が流れていたことがわかっています。

2018年、この遺跡で発掘調査を行いました。場所は、大藪遺跡の西部に位置し、また中世の居館跡である下久世構跡にもあたります。この調査では、弥生時代後期の方形周溝墓と溝、そして、鎌倉時代や室町時代の建物や櫓、井戸などの遺構が見つかりました。ここでは、今回の調査で見つかった



写真1 2018年調査区（西から）



写真2 弥生土器の出土状況（北東から）



写真3 溝から出土した弥生土器

弥生時代後期の遺構と、大藪遺跡について紹介します。

方形周溝墓 調査では方形周溝墓の周溝を検出しました(写真1)。主体部の埋葬施設は後世の削平によって失われたと考えられます。周溝の方位は真北から西へ約30度振れており、規模は約15m×13.5m以上で、溝の幅は最も広いところで約0.8mあります。深さは0.55m～0.8mで、一辺の中央付近が最も深く、隅部では浅くなります。京都盆地でみられる方形周溝墓としては規模が大きいものですが、これは被葬者の階層性が反映されて墓が大型化していくという、弥生時代後期の特徴が現れていると考えられます。

溝 北東から南西方向の溝で、幅0.3～0.5m、深さ0.5～0.7mあります。溝底の標高から、水は北東から南西に向かって流れていたと考えられます。この溝から

は、弥生時代後期の土器が多量に出土しました(写真2・3)。

集落の特殊性 大藪遺跡は、旧河川沿いの微高地につくられた集落遺跡です。同じ旧河川沿いには、北西に中久世遺跡、南に東土川遺跡といった弥生時代から古墳時代の集落遺跡があり、利便性の高い土地を利用してつくられた集落が大藪遺跡の他にも存在したことがわかっています。その中で、今回の調査地周辺では、大型で排水施設を伴う堅穴建物や工房施設と考えられる住居とは考えにくい堅穴建物、弥生時代の京都盆地の集落ではほとんど見られない^{（注1）}棟持柱付の掘立柱建物が2棟も見つかっています。

これらの遺構が集中する様相が周辺の集落遺跡とも異なることから、今回の調査地一帯は、弥生時代後期には、祭祀や集会場などといった居住域と異なる特別な空間

であった可能性が考えられます(図1)。

また、今回見つかった弥生土器には、近江(滋賀県)系の甕が多くみられました。その中には、①近江南部で製作されて運び込まれた搬入品の土器、②在地の土を用いて搬入品を忠実に模倣した土器、③搬入品を十分に模倣しきれていない土器、の3種類がみられ、近江との交流、または影響を強く受けていることがわかりました。その他、過去の調査では吉備(岡山県、広島県東部)からの搬入品とみられる土器も出土しており、東西両方の地域と交流していた様子がうかがえます。

他の地域との交流が盛んに行なわれ、特殊な大型の建物が存在した大藪遺跡は、桂川西岸地域の中でも特別な場所として存在したのではないのでしょうか。

(末次由紀恵)